



湖東地域の森林（本文中にびわ湖の森を元気にする取組の関連記事があります）  
写真提供：一般社団法人 kikito

目次 / contents

**新年の挨拶** ..... 2  
 新年あけましておめでとうございます

**ひと・まち・地域** ..... 4  
 三重県の新しいお米「結びの神」が誕生！／原田弘之・武藤健司 4  
 エネルギーの「見える化」！豊中市での市民向け省エネ推進社会実験  
 ／山崎衛・中川貴美子・森野真子・畑中直樹・石井努 5  
 びわ湖の森を元気にする kikito の取り組み～ニュースレター今号は  
 “森林整備に貢献する紙”で発行～ ／中川貴美子・畑中直樹 6  
 期間限定サブリース PROJECT による大和・町家の利活用  
 ／岡崎まり・嶋崎雅嘉・中塚一 7

**きんきょう** ..... 8  
 地域に根ざして30年 ..... 8  
 地域に根ざして30年 ..... 8  
 堺高校発、学校から始まるエコな建物の使いこなし  
 ..... 10  
 震災復興と観光のチカラ ..... 11  
 都市を計画する仕事のこれから ..... 13  
 アイ・スポット NEWS ..... 13

**うまいもの通信** ..... 14  
 地域で創るご当地バーガー「ねやバーガー」 ..... 14

**メディア・ウォッチ** ..... 15  
 『大阪アースダイバー』 ..... 15

**まちかど** ..... 16  
 海と島と街を巡るクラフトフェア 瀬戸内生活工芸祭 2012 / 森岡武 16



新年のあいさつ

新年あけまして  
おめでとーございます

### 専門性を高めた組織再編によって、地域づくりに貢献していきます／代表取締役社長 森脇宏

昨年、アルパックは新しい経営体制を確立するとともに、関西に拠点を置く京都事務所と大阪事務所の組織を大きく再編しました。この再編は、地域社会の新たなニーズに適切で柔軟な対応を図るとともに、潜在化しているニーズの発掘と提案にも取り組み、地域づくりに積極的に貢献していくことをめざしたものです。

従来、関西では京都事務所と大阪事務所が、それぞれ担当地域への密着度を高めるとともに、相互に競い合うことで活力を高めてきましたが、今後のアルパックの社会的責務に鑑みて、総力結集の方向に舵を切り替え、専門性を軸とするグループを事務所横断型で設置しました。具体的には、社内の多様な専門家の提案力（ソリューション力、政策提言力等）や実行力（ノウハウ、ネットワーク等）などを高めるため、6つのエキスパートグループに再編しました。この結果、これまで京都事務所と大阪事務所で分けていた担当地域制を解消し、事務所間の人事異動も大幅に行いましたが、従来からの顧客との関係等にも考慮して、京都事務所と大阪事務所にスタッフがまたがるグループもいくつか設けました。

なお、実際の業務は多様な側面を持っているので、これらのエキスパートグループが連携し、全社の総力を結集して取り組んでいます。

6つのエキスパートグループは、次のような専門性を持ち、また多くのグループには、よりテーマを絞った複数のチームを内包させています。



#### ①公共マネジメントグループ

自治体の総合計画はもとより、多様な地域サービスの運営に関わるプランづくりを支援するため、「地域経営」「保健・福祉」「交通」「教育・文化」のチームで構成しています。

#### ②都市・地域プランニンググループ

都市や地域の空間的な将来像を立案し、その実現を支援するため、「都市・農村プランニング」「都市デザイン・コミュニティプランニング」のチームで構成しています

#### ③地域再生デザイングループ

地域におけるソーシャルキャピタルをハード面とソフト面から再生することを支援するため、「市街地整備」「生活デザイン」「地域プロデュース」のチームで構成しています。

#### ④地域産業イノベーショングループ

地域産業のイノベーションや、地域資源を活かした地域振興を支援するため、「産業政策・都市商業」「地域活性化」のチームで構成しています。

#### ⑤環境マネジメントグループ

持続可能な地域環境づくりを、社会システムづくりの面から支援するため、「環境・エネルギー」「エコまちづくり」のチームで構成しています。

#### ⑥建築プランニング・デザイングループ

社会的存在である建築が、地域の中で長い時間その役割を果たせるよう、プランニング（計画）とデザイン（設計）を一体のものとして取り組んでいます。

以上のような6つのエキスパートグループを有する京都事務所と大阪事務所を中心に、東京事務所、名古屋事務所、九州事務所を加えて、今年も持続可能な地域づくりに貢献していきたいと思ひます。

昨年、アルパックは創業45年を迎えました。2017年のアルパック創業50年を前進の中で迎えるため、専門性を高めた組織を推進力として、さらに実績と実力を積み上げていきたいと思ひますので、引き続きご指導とご支援をよろしくお願いいたします。

本  
年  
も  
ど  
う  
ぞ  
よ  
ろ  
し  
く  
お  
願  
い  
た  
し  
ま  
す



#### 代表取締役会長／杉原五郎

2012年のグッドニュースは、なんといっても山中伸弥先生のノーベル生理学・医学賞受賞でしょうか。再生医療の決め手となるiPS細胞の大発見は、人類のこれからにとって素晴らしいことでした。山中先生の、研究者としての真摯な姿勢、不治の病にある患者さんを救いたいという社会的使命感、研究所の運営に対する情熱とスタッフへの気配りなど、感動しました。

2013年も、世界にとって、また、日本にとって、希望のもてる1年になればと思います。アルパックも、人々の幸せの実現に向けて、新たな気持ちで奮闘努力します。

#### 取締役副社長・東京事務所長兼名古屋事務所長／堀口浩司

「あなたと、コンビニに」「ちかくて便利」「まちのホットステーション」いずれもコンビニエンスストアチェーンのキャッチフレーズです。多品種の品揃えで地域の小さな需要にきめ細かく応え、専門店で構成された商店街を脅かす存在になりました。しかし店舗数や地域カバーで飽和状態になり、最近では少量で高品質、特色のある商品開発で新たな需要を開発しつつあります。地域計画建築研究所は「地域密着」「まちの町医者」といったキーワードで、ある意味コンビニエンスストアのような戦略で生き残ってきました。今回の組織改造も一種のプレミアム戦略という位置づけです。でも「地域とコンビニに、アルパック」という姿勢は健在で頑張ります。

#### 取締役大阪事務所長／中塚一

年末に、建築と社会という雑誌で「脱成長の時代を考える」というテーマで思案する機会を頂きました(2013年1月号)。まちづくりの現場で日々感じるのは、従来の社会システムや仕組みが機能不全を起こしており、変革の真ただ中にあるということです。私達は時代がどう動いていくのかを「既に起こった未来」に関する知識と現場での経験を踏まえながら「仮説」し、広い視野を持った創造的な判断により、行動していくことが求められています。

今年は、先ずは関西での足元を固めながら、「自分、自分達にできる重要なことを列挙したリストを作り、1番目の項目から実行」していきたいと考えております。よろしく申し上げます。

#### 取締役副社長／馬場正哲

昭和40年代後半、「学生」が学生と見分けられなくなったと教授が語ったのを覚えています。その後も「主婦」という像が曼荼羅化するなど、現代社会は読めない時代となりました。ついに人間関係までも歪な様相を呈しています。しかし、もうこのままではすまないという社会行動も同居し「絆」などが問われたことも実感します。

世界に先行した問題状況が、私たちの仕事の現場です。再び、自然への畏敬、地縁の自覚、小さな殖産から展望を切り拓きたい。昨年、大腸手術を受け余命をいただき、ありがたく、まだ頑張れそうです。一燈照隅 万燈照国 ◇ 一結活隅 万結活国

#### 取締役京都事務所長／松本明

昨年の組織改革により、京都事務所には公共マネジメントグループ京都チーム、地域再生デザイングループ地域プロデュースチーム、産業・地域経済イノベーショングループ産業政策・都市商業チーム及び地域活性化チームの4チームを配置し、地域の戦略的なマネジメントや活性化を担う事務所として再スタートを切りました。大阪・名古屋・東京各事務所の多彩なプロフェッショナルチームと連携しながら、関西一円はもとよりグローバルに展開する、パワフルでフットワークのよい横断的な組織を目指しています。混迷の昨今、解決すべき課題が社会に山積しています。

本年も精一杯頑張ります。どうぞよろしく申し上げます。

#### (株)よかネット 代表取締役(九州事務所長)／山田龍雄

昨年は原発問題のように蓋をされた安全神話や効率主義で突っ走ってきた政策こそ、大きな落とし穴があることに気づかされた1年でした。

九州事務所(よかネット)では、福岡県や佐賀県を中心に公営住宅関連、駅前開発事業、観光振興、地域ブランディング、地域公共交通の改善事業、過疎地の買い物支援、食のブランドづくりなど幅広い仕事をさせていただいております。新しいテーマの仕事では、改めて勉強・研究をしないといけないという有り難い運命にあります。今年もチャレンジ精神で邁進していきたいと思っておりますので、ご指導、ご鞭撻のほど、申し上げます。



ひと・まち・地域

三重県の新しいお米  
「結びの神」が誕生！  
／原田弘之・武藤健司

### 毎日どんなお米を食べていますか？

毎日どんなお米を食べていますか？スーパーでの激安米、産地からのお取り寄せ、自分で生産？複数の種類のお米を料理によって使い分けたり、食べ分けたりする人もいますようです。品種も、コシヒカリ、キヌヒカリなどのメジャーな品種のほかに、北海道のゆめぴりかや、山形県のつや姫などのように、産地ブランド戦略を立てて、販売を強化しているものもあります。今年度、三重県のお米のブランド化に関わらせていただいた経験を報告します。

### 三重県の新品種「結びの神」を食べよう！

昨年（2012年）の10月20日、三重県内の量販店で、三重県が新たに開発したお米の販売が始まりました。名前は「結びの神」。由来は、食・社会・自然と人がもっとつながることに願いを込め、平成25年に、伊勢神宮が20年に一度の式年遷宮を迎える記念すべき時節に誕生することも重ねています。ネーミングは、数ある候補から、三重県、JA全農みえ、農家、市町などの関係者による投票と協議を重ねて決めました。

三重県では、温暖化が進む中で、夏期の高湿障害に対応するため、農業研究所で平成12年から新たな品種の開発に着手しました。そして、ヒノヒカリ

の血を引く良食味系統でいもち病にも強い品種と、キヌヒカリの血を引く早生の良質系統を掛け合わせ、今回の新品種が誕生しました。大粒で、コシヒカリと並ぶ良食味と言われており、私も食しましたが、甘みやあじわいがあるお米です。ぜひご賞味ください。通販で購入できます。

### 【JA 全農みえのホームページ】

<http://www.ja-town.com/shop/g/g4501-musubinokami/>

### 選ばれた農家が工夫してつくるお米

「結びの神」は、誰でもつくれるわけではなく、栽培したいと手を上げ、条件に合う県内農家がつくっています。品種も大切ですが、つくり方から品質管理をしていこうというものです。

すなわち、苗の移植時期や施肥、栽培暦などの栽培基準を設定し、それに沿って責任を持って栽培できる農家を選定しているのです。

もう一つの特徴は、単にお米をつくっているのではなく、米づくりの価値を高め、発信するために、各農家に周辺の地域資源を積極的に取り上げ、商品価値に反映するように勧めています。そのために、各農家には「米づくりPRシート」を書いてもらっています。水のおいしさ、生き物のこと、地域の物語のこと、施肥の方法の工夫などいろいろなメッセージが書かれています。

平成24年産は、選定された農家20戸により、約120tを生産しました。これから年々拡大していく予定です。三重県の新しいお米「結びの神」に、どうぞ注目ください。



## エネルギーの「見える化」！

豊中市での市民向け省エネ推進社会実験

環境マネジメントグループ／山崎衛  
中川貴美子・森野真子・畑中直樹  
公共マネジメントグループ／石井努

東日本大震災以降、エネルギーがより身近に認識されるようになりました。家庭におけるエネルギー使用量削減には、市民一人ひとりが自分の使用するエネルギーを意識できるよう、エネルギーの「見える化」が有効であるとされています。

豊中市では地球温暖化防止地域推進計画「チャレンジマイナス70プラン」を平成19年度に策定し、コミュニティを重視した取り組みを進めてきました。豊中市での温室効果ガス排出量は特に家庭部門が多いため、家庭での省エネを進めるために、「省エネ相談会」や「家電省エネ診断」、省エネにつながる行動をした方に付与され豊中市内の商店街等で使用できる「エコポイントチケット『とよか』」の運用等に取り組んできました。また、エネルギー会社、商店街、建設業協会、電機商業組合、NPO等からなる「チャレンジマイナス70推進協議会」を設置し、省エネ化を推進しています。特に、建設業協会と電機商業組合には、省エネマイスターとしてご協力いただいております。

平成23年度からは、省エネの効果を「見える化」して定量的に検証するために「見える化機器の貸出」（定置式タイプと、平成24年度からはインターネットでいつでもどこでもチェックできるタイプの2種類）を行い、社会実験を実施しています。

## エネルギーの「見える化」生活

社会実験の方法は、まず、省エネ相談会や市の公報、特設ホームページを見て興味を持ってくださった方のご家庭に省エネマイスターが伺い、見える化



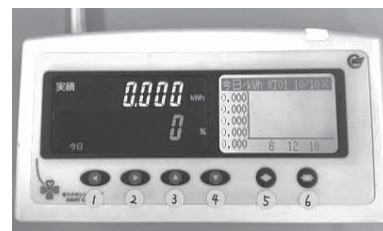
省エネマイスターの協力で開催した省エネ相談会

機器を設置します。貸出期間は、定置式が2週間、インターネット活用型が6週間です。期間の前半では、特に見える化機器を意識せず生活していただき、後半は意識して生活していただくことで、効果を計測します。また、電力だけにならないよう、ガスについても日々の使用量をメーターでチェックしていただきます。

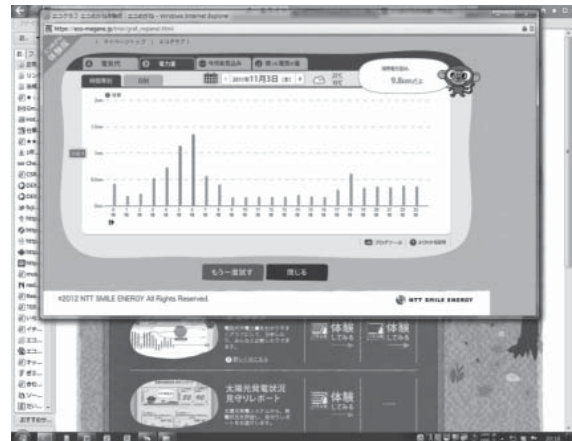
さて、気になる省エネ効果は、電力とガスをあわせて、これまで平均10%程度削減を達成しています。中には、約60%削減という方もいらっしゃいました。参加者からは、「家電の消費電力を全て調べて取り組み勉強になった」、「子どもと一緒に取り組むことができて楽しかった」といったご感想もいただいております。

## 結果発表会

特に熱心に取り組まれた方には、「省エネセミナー」で発表をお願いしています。今年度は2月16日（土）に「とよなか男女共同参画推進センター『すてっぷ』」にて開催予定です。どなたでも参加可能ですので、ぜひお越しください。



見える化機器（定置式）

見える化の様子（インターネット活用型）  
資料提供：(株)NTT スマイルエナジー



びわ湖の森を元気にするkikitoの  
 取り組み〜ニュースレター今号は  
 森林整備に貢献する紙で発行  
 環境マネジメントグループ  
 中川貴美子・畑中直樹

### びわ湖の森を元気にする kikito の取り組み

滋賀県湖東地域を中心に、びわ湖の森にたずさわる森林所有者、製材業者、木製品加工業者、家づくり団体、設計士、木質エネルギー事業者、市民団体、行政等が集まり、平成20年度より湖東地域材循環システム協議会(kikito)を設立しました。協議会では、森林整備につながる地域材の供給体制づくりやCO<sub>2</sub>吸収・固定認証制度の確立等、出来るだけ地域内でお金をまわすことを念頭にびわ湖の森を元気にする取り組みを進めています。今年度からは一般社団法人kikitoを設立し、活動の幅を広げています。

アルパックも設立当初から協議会会員として参加し、監事や認証委員を務めています。ニュースレター本号にて、初めて「kikito ペーパー」が採用された記念に、kikitoの取り組みのひとつである「森林整備に貢献する紙製品の開発」についてご紹介いたします。

#### 山主さん限定。売れない間伐材を買取る

紙製品の原料は、市場に出しても値がつかない木や、間伐した後に山に放置してある木などを山主さんから直接kikitoが買い取っています。今年で6年目ですが、年々買取量は増え、今年の1回目では、彦根市、多賀町、東近江市の3地域から延べ20台のトラックで、計約60tが集まっています。これらの木は山主さんから6,000円/tで直接買い取った後、チップ工場へ運び、そこから製紙工場・文具メー



原木買い取りの様子

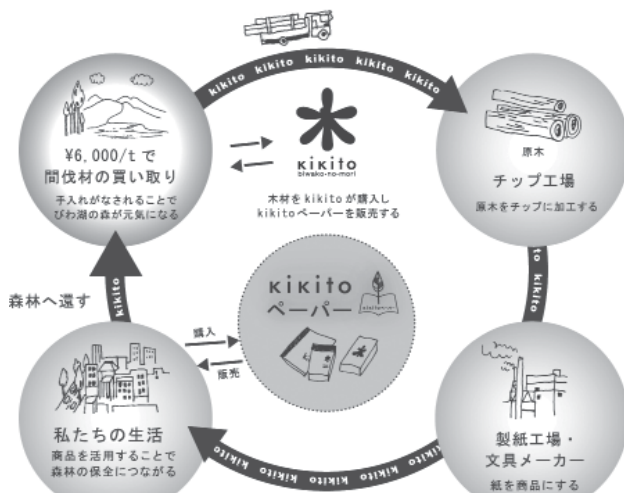
カーを経て、紙製品となります。コピー用紙や印刷用紙等はクレジット配合を、フラットファイルは実配合されています。(クレジット配合：製紙工場への入荷量に応じて、製造する紙に間伐材が配合していると見なす、実配合：実際に配合されている)

“山にお金を還そう”を合言葉に始まった活動ですが、山主さんは“お金”というより、“山が少しでもきれいになるのだったら”“息子へ山を教えるきっかけになれば”“kikitoのメンバーが今年も待っているの”……など様々な思いとともに運んでくださっているようです。

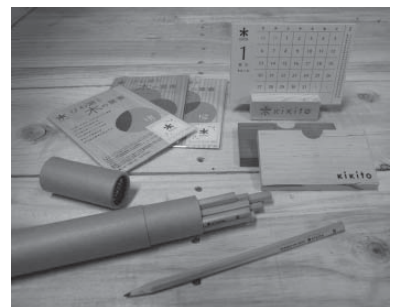
#### 三方よし(売り手よし、買い手よし、世間よし)の取り組み

kikitoの取り組みは、近江商人の三方よし(売り手よし、買い手よし、世間よし)を基本理念としています。「世間よし」は「社会貢献」そのものであり、kikitoの紙製品は、自治体や企業の環境貢献活動を応援する商品として、販売実績を伸ばしています。

今回ご紹介した取り組みは、ほんの一部です。kikito商品がamazon.comでも購入できるようになるなど、日々進化している取り組みについてHP(<http://www.kikito.jp/>)等もご覧いただけると幸いです。



三方よし(売り手よし、買い手よし、世間よし)を理念としたkikitoペーパーの仕組み(kikito ちらしより)



kikito 商品

期間限定サブリースPROJECT  
による大和・町家の利活用  
地域再生デザイングループ  
／岡崎まり・嶋崎雅嘉・中塚一

### 歴史的な町並みが残る地区で空き家が増加

奈良県内には、歴史的な町並みが残る地区が多く残っていますが、最近、空き家のまま放置され老朽化が進む町家が増えてきています。その要因としては、空き家でも仏壇や家財道具が残っているや、道路側の店舗部分は空いているが、奥の居住部分に住んでいる、建物が古くなっており、改修する必要があるが資金がない、空き家を他人に貸すと世間体が悪いなどが複雑に絡まり、なかなか空き町家の利活用が進まない状況となっています。このまま行けば、町家を含む歴史的な町並みや、その地域で引き継がれてきた祭りや生業等の人々の営みが、確実に失われていく危機的状況が迫ってきています。

### 現代アートイベント「HANARART」の開催

奈良県では、2011年より、県内の歴史的な町並みが残る主な地域のまちづくり団体が連携し、町家に現代アート作品を飾るイベント「奈良・町家の芸術祭 HANARART」が開催されています。

イベント全体は「現代アートが持つエネルギーが、町家や町並みの魅力をさらに深め、様々な発見、出会いや交流、その可能性を広げる（HANARART 実行委員長 上田達也氏）」という目的で開催されており、空き町家の利活用の視点での2011年の成果として、期間限定であれば、軒先や店先等を所有者からお借りすることが出来るという感触を得ることが出来ました。

### 「大和・町家サブリース PROJECT」

このような成果を踏まえ、今年度は、HANARART



五條新町の修復された町並みと HANARART

2012の開催時期に合わせ、全県的な空き町家情報の一元化や町家の利活用に関する情報の受発信等を行っているネットワーク組織「大和・町家バンクネットワーク協議会」が、国土交通省の委託事業を活用し、期間限定型のサブリース事業に取り組みられました。（アルパックも事業の一部をお手伝いさせていただきました）

PROJECTの目的は、協議会が、空き町家を期間限定でオーナーからお借りして（マスターリース）、町家を利用したい個人、企業、NPOなどにお貸しする（サブリース）ことで、町家の新しい利活用の可能性を見つけると共に、継続的なサブリース事業の課題と解決方法を探るものです。

### キャッチコピーは「この秋、町家がおもしろい。」

今回、パンフレットのキャッチコピーの通り、事務局から思いもよらない利活用の取り組みが提案されました。例えば、「手作り鉄道模型ジオラマを展示販売したい」や、「フェアトレードやコミュニティトレードの衣料品や雑貨などを販売したい」、「奈良初上陸のファッションブランドを展示販売したい」などなど。具体的には、県下4地域の7軒で、6組のユーザーが、PROJECTの趣旨に賛同され、空き町家の利活用に取り組みられました。（中塚一）



### 「町家で何かやりたい人、募集します」

私は入社以来、様々な地域で住宅マスタープラン等の策定に関わらせていただいています。その度に空き家の増加が地域の大きな課題になっていることを実感してきました。

空き家活用に向けて空き家バンク制度の導入などを検討してきましたが、取り組み内容等を考える立場に立つだけでなく、一度利用者側に立って実体験してみたいという思いが強くなっていきました。その様な時に目にしたのが『町家で何かやりたい人、募集します』というキャッチコピーでした。

大和・町家サブリースPROJECTでは1週間単位で賃借契約が出来る仕組みとなっており、このことが町家を借りて住んでみようと思えた大きなきっかけとなりました。



## ひと・まち・地域

### 町家マッチング

私が町家バンクの方をお願いした町家選びの条件は、通勤時間が1時間程度であることとお風呂が使えることの2つでした。この条件に合う町家として桜井市三輪にある物件を紹介していただき、2週間の町家暮らしが始まりました。

### レンタル品探し

2週間という期間は、町家を借りるハードルを下げるものですが、それ以外の生活道具をレンタルして揃えるには難しい条件となるものでした。個人向けのレンタル商品は月額や半年などのスパンで値段設定をされている事が多いからです。

町家バンクがレンタル会社の役割も担い、1週間単位で電化製品等を格安で貸し出すことが出来れば、出張や長期旅行等で訪れた人が、町家暮らしを選択しやすくなるのではないかと思います。

### 町家ちょっと暮らし

町家での暮らしは「まちに住む」ということを強



大和郡山の旧遊郭を活用した HANARART



サブリース PROJECT での衣服の展示販売

く感じるものでした。町家に住む事自体、中庭や縁側を通して外と緩やかにつながっており、忘れがちな日々の移ろいを感じることができましたが、それ以上に、近くを流れる川や神社、周りのまちなみを散策することで、昔から大切にされている地域の営みを感じることができました。

働きながらの町家暮らしだったので、近隣の人と顔見しりになる機会が持てなかったことが残念でした。周りに住む人も誰が住んでいるのか不安だったのではないかと思います。

空き家活用を促進するために借りやすいシステムを構築することも大事ですが、それ以上に利用者と地域住民との接点をどのように生み出すかが重要だということを感じました。

今後は、地域住民がより安心して空き家活用に協力出来るように、空き家の所有者や利用者の目線に立つだけでなく、地域住民の立場に立った提案も考えていきたいと思っています。(岡崎まり)



## きんきょう

### 地域に根ざして 30 年

#### 名古屋事務所／尾関利勝

#### 名古屋 30 年の御礼

名古屋は今年で事務所開設満 30 年。「まちの町医者」、「まちづくりミュージアム」、行動するシンクタンク・コンサルタント・デザイン集団「ドゥータンク」を自認し、名古屋～中部圏を中心に、時には関東、中国、四国、九州にも足を伸ばして活動を続けてきました。ひとえに私達に仕事の機会をご提供下さった各地の皆様方のご支援があればこそと、心から感謝を申し上げます。有り難うございます。

#### 荒波を乗り越えて

30 年の後半では、まちづくりや地域計画の業務が国と地方の財政事情から低迷を続ける中、事務所のリノベーションに努力を傾注し、何とか、出口が見える状況にきました。

#### 次の 50 年をめざして

30 年を期に、これからは、経済の低迷と政治の混迷に愚痴を言うのを止め、夢を持って生きる持続するまちづくりの働きかけを続けながら、私達の職能の継続と改革を軸にアルパック名古屋の再生と世代交代を進めます。引き続きご指導・ご支援を賜りますようお願いいたします。

#### 近況の報告

##### ◇名古屋城本丸御殿

四半世紀に渡り市民運動を展開した名古屋城本丸御殿の復元は、全体を 3 期に分け、今年 5 月

29 日、その第一期、玄関虎の間、表書院から部分公開されます。楽しみです。

消失前の名古屋城が旧国宝城郭建築第一号であったことはあまり知られていません。

桂離宮古書院と同じ 1615 年創建の正統的武家書院建築の復元は、こけら葺きの最盛期の姿に復元され、工事現場でさえ大変見応えがあり、完成後は建物と一体に復元模写された障壁画とともに創建 400 年の歴史を超えた武家文化の神髄を見ることが出来ます。是非お越し下さい。

##### ◇地域まちづくりの広がり

地域に根ざして 30 年、地域主体のまちづくりを息長く応援し続け、去年は新たに 5 地区を応援しました。

名古屋市のスタンスもあって、今、地域まちづくりが名古屋に





科学館と地元の清掃活動

広がっています。

都心に関しては、西は名古屋駅新幹線口から東は栄東まで、広小路・錦通の沿道ブロックのほとんどで、地域に即した特色あるまちづくりが動き始めています。以下、都心～周辺の主な例を紹介します。

#### ◇栄ミナミ地域活性化協議会

私達が開発計画に関わった中央高校跡地のナディアパークと矢場公園を核に、複数の町内会と商店街が連合する栄ミナミ地域活性化協議会が音楽祭、盆踊り、グルメ選手権、ナゴリン（アイススケートリンク）の四季のイベント実績を踏まえ、昨年南大津通のホコ天を復活させました。

#### ◇太閤通口まちづくり協議会

ともすれば駅裏と言われ、超高層ビルの再開発が続く駅東との格差が見られる名古屋駅新幹線口で、安心・安全・防犯の働きかけをきっかけに、町内会・住民・ビルオーナー・商店・ホテル・専門学校が一緒になり、市や区役所、警察の応援を得て、まちづくり協議会を設立しました。

当面、まちづくりの構想づくりを目標に、協議会設立後半年で、専門学校が協力したアニメ・キャラクターの製作、地域からスタートした美少女アイドルグループ・デラの参加など地域の特徴を活かしたユニークなイベントを開催、盛り上がっています。

#### ◇荒子の里協議会（都心外）

戦国武将の一人、前田利家の出身地・荒子は中世の荘園以来続く歴史的な旧集落地で、尾張四観音の一つ観音寺があり、磨けば光る特色のあるまちとして、前々からその可能性に着目して



科学館 50 周年企業協賛バナー

いました。

ここで、従来の地域活動の実績をもとに住民・ボランティアグループ・地場企業の方々と協議会を設立しました。

地域の魅力の発信やガイド、ど真ん中祭の荒子版・歌舞伎もん祭、前田公出身地としての金沢との交流などの実績をもとに、名古屋市の都市計画マスタープランの地区の位置づけを契機にして、市や区の後押しで協議会を設立し、梅の里づくりなどのアクションと併行して、まちづくりの構想づくりをめざしています。

前田利家公の故郷に代表される地域の歴史、馬道具（ばどん）などの伝統的な祭文化、観音寺と円空仏、榎の生け垣と家並みの美しい門前集落景観、新交通機関おなみ線の駅前広場には前田利家像など豊富な地域資源を持ち、地域に住む人々の誇りの高いまちだけに、地域のまちづくり課題は多彩・多様です。

これから協議会がどのようにこれらを活かして展開していくのか、注目されます。初動期のまちづくりは地域の認知を得るまでに苦労が多いものです。じっくり、確実に応援していきたいと思えます。

#### ◇芸術と科学のまちづくり

昨春、世界最大のプラネタリウムを持つ名古屋市科学館がリニューアル・オープンし、秋に開館 50 周年を迎え、いまだに早朝から入場予約券を待つ人の列が並び、観光バスが各地から訪れる人気です。

事務所から 5 分、何時でもご案内します。お訪ね下さい。

今年は隣の名古屋市美術館の

## きんきょう

開館 25 周年。一昨年末に名古屋商工会議所を介して、両館がある白川公園を「芸術と科学の杜」と位置づけ、地元連携の相談を受けました。

芸術と科学のまちづくりなら、アルパック名古屋の得意。日頃の地域ネットワークを活かし、地元 2 商店街・4 町内会・地場企業の方々とまちづくり準備会をつくり、地域と両館との仲立ちをしました。

地域貢献のための協賛企業名入り街路灯バナー掲載が、名古屋駅地区まちづくり協議会の努力で昨年可能となり、おかげで広小路と桑名町の商店街街路灯 81 基に科学館 50 周年企業協賛バナーを掲載することができました。

一方、来館者がまちで食事する店を知りたいとの要望から、まちづくり準備会がマップを作成、初回は実験で掲載無料とし 50 店舗近くの応募でしたが、有料の本番では半減。まちづくりの難しさです。

11 月 3・4 日（土日）の科学館 50 周年当日は、地元店舗・企業・コンベンション・ビューローの協力で、科学館敷地内でバザーを開催。初の地域連携イベントは、公共文化施設が発端となるまちづくりとしては名古屋第一号。好評の反面、課題も残りました。

相談を受けて 1 年以内、超特急でここまで来ました。今後は地元のまちづくりが確実に進むことが本音の狙いです。

今、名古屋都心では 11 地区で地域まちづくりが展開し、新しいまちづくり時代の到来をひしひしと感じます。引き続き、応援を続けて行きます。



きんきょう

## 堺高校発、学校から始まる エコな建物の使いこなし

環境マネジメントグループ/  
畑中直樹・森野真子、建築プ  
ランニング・デザイングル  
ープ/原田稔

以前、ニュースレター（2009年11月158号）でも紹介しました堺市立堺高等学校の「学校エコ改修と環境教育事業」も昨年度に改修工事を終え、今年度からエコ改修された2棟の実習棟が授業で使用されています。

そもそもこの事業は環境省のモデル事業であり、学校施設をエコ改修することにより、建物でのエネルギー消費を抑え、CO<sub>2</sub>排出量を削減する目的があります。

しかしながら、現実には学校（公立学校）は冷房設備を備えていないところがほとんどで、照明と言っても主に昼間に使用する程度で、エネルギー消費量を減らすことはなかなか難しい課題です。

一方で、未だに断熱もされていない建物も多く、生徒たちは、夏暑く、冬寒い環境のなかで授業を強いられています。

学校をエコ改修するということは、実はCO<sub>2</sub>排出量を削減するという以前に、生徒たちの学習環境を改善するという大きな目的があるように思います。

今回の堺高等学校のエコ改修においても、夏の暑さと冬の寒



建築インテリア科を対象とした現場見学勉強会

さ改善が最も重要な課題となりました。特に、大空間を持つ機械科実習棟は屋根や外壁の断熱性能に乏しく、真夏には日射により直天井面の温度は50℃近くまで上昇し、その輻射熱を受けて室内温度も40℃近くまで上昇することがまれではありませんでした。

これを改善するために、外壁の断熱や屋根の遮熱・断熱性能を上げるとともに、自然換気を有効に活用する工夫がなされました。既設のトップライトを開閉式に改修し、熱い空気を逃がし、壁の窓には夜間の涼しい空気を取り込む（ナイトパージ）小窓が設置されました。シーリングファンにより室内温度を拡散するとともに体感温度を下げる工夫もなされています。

その結果、今年度、改修後に大阪大学が行った夏の環境調査では、機械科実習棟の天井面の表面温度は35℃以下となり、室内温度も34℃以下と室内環境がかなり改善され、先生方からも快適になったと好評を頂いています。改修後の効果については、「日経アーキテクチュア：2012-10-25」でも紹介され、以下のサイトでもご覧になれます。

「ケンプラッツ」  
<https://kenplatz.nikkeibp.co.jp/premium/dl.jsp?id=2359467&pg=search>



改修された機械科実習室



改修された実習棟（左）と中庭

また、同時に行われた耐震補強の鉄骨フレームを利用して設置された緑のカーテンは、西日を遮る役目をしています。

この他にも、もう一つの対象棟を中心に耐震化を含めたエコ改修や外構の緑化などがなされています。

このように、今回のエコ改修では機械設備に頼らないパッシブな建築の考えが取り入れられています。しかしながら、その効果を最大限活かすには、使い手がその原理を理解し上手に使いこなすことが必要です。そこで、堺高等学校ではエコ改修工事と併行して様々な環境教育の取り組みが行われて来ました。

例えば、校舎のエコな使いこなしをまとめたエコマップも作成されました。今後、生徒たちがここで学んだエコな建物の使いこなしを自分たちの家や地域で実践してくれることを期待します。

本事業は環境省のモデル事業であり、堺市の委託の元、大阪大学大学院の山中俊夫教授と大阪府立大学大学院の上甫木昭春教授にアドバイザーとして参画して頂き進めてきました。改修設計は昭和設計・高橋建築設計事務所JVが担当し、私たちアルパックは専任事務局として事業を統括し進めるお手伝いをさせて頂きました。



生徒たちによる環境測定



昨年6月にオープンした  
石巻まちなか復興マルシェ

## 震災復興と観光のチカラ

公共マネジメントグループ

／高田剛司

### 日本観光研究学会全国大会 in 石巻・仙台

昨年11月30日～12月2日の3日間、日本観光研究学会第27回全国大会が石巻と仙台で行われ、私も参加してきました。テーマは「地域の再生と観光のちから」。学術論文の発表は最終日に仙台の宮城大学で、その前の2日間は、復興交流フォーラムと地域視察が石巻市内で行われました。復興交流フォーラムでは、NPO法人「森は海の恋人」の島山重篤理事長による基調講演、石巻専修大学、石巻市、石巻観光協会、東松島市・観光物産協会、女川町・観光協会、地元新聞社による現地報告、そして学会員との交流会でした。

石巻地域からの報告では、被害があまりにも甚大で、特に地盤沈下の被害に対する基盤整備の方針が定まらない中で復興を進めていくことが非常に難しいことを指摘されていました。そのような中でも、震災の教訓を伝える語り部の活動が広がっている状況が紹介され、観光によって地域経済を活性化させたいという地元関係者の思いが伝わってきました。

地震や津波からどのようにまちを守るのか、これまでの住まいの場所をどこに確保するのか、コミュニティはどうなるのかといった点は、今回の震災によって突きつけられた都市計画の大きな課題です。一方で、農業や漁業、商工業、観光の面から、

地域経済の活力を取り戻すことも同時に考えていかなければなりません。

### 被災状況を目の当たりにして考える

観光には、発地から目的地（現地）への移動が伴います。バーチャルではなく自ら現地を訪れ、体験・体感することができます。

今回訪問するちょうど2週間前に、石巻市中心部にあるマンガミュージアム「石ノ森萬画館」が再開しました。生活の場の復旧・復興があまり進んでいない中で、観光施設の再開には賛否両論もあるようですが、ここを訪れると、石ノ森章太郎作品から、新しいことにチャレンジすることの大切さを学べます。また、震災時の様子を伝える展示コーナーでは、地震発生直後の「ラジオ石巻」による放送が流れていて、当時の切迫した状況を耳からも感じられる空間となっています。

地域視察の時には、焼けた校舎がそのままになっている門脇小学校の校庭に立ち寄り、その地区の出身で津波に遭遇した石巻専修大学の学生さんから話を聞きました。日本製紙(株)石巻工場では、社員の方から工場の復旧再開までの様子を詳しく伺いました。

このように、テレビの映像ではわからない震災現場の臨場感、スケール感を被災地に訪れることによって感じることができました。

### 飲食やおみやげの消費が地域の経済を元気にする

地域視察の昼の集合場所は、「石巻まちなか復興マルシェ」でした。ここでは複数の復興企画商

品を買うことができ、中心市街地では、少しずつですが商店や飲食店が再開してきています。仮設商店街の「石巻立町復興ふれあい商店街」もオープンしています。よく言われるように、観光は地域に経済波及効果をもたらします。観光客が飲食をし、おみやげものを買って、宿泊することによって、地域の産業が元気になれば、地元の雇用と定住に結びつきます。とりわけ漁業が地域産業の柱である石巻では、加工品製造も含めて、その影響は大きいと思われます。

今年の3月で震災から丸2年を迎えますが、被災地の復旧・復興はまだ緒に就いたばかりです。一人でも多くの人が被災地を訪れることで、観光が地域のチカラになり、訪問者にとってもまちづくりを考える機会になることを願っています。



昨年11月に再開した石ノ森萬画館

### 都市を計画する仕事のこれから

代表取締役会長／杉原五郎

### 都市計画はどんな仕事？

1974年4月にアルパックに入社して、都市計画コンサルタントの仕事に携わることになった。明治生まれの両親からどんな仕事をする会社に入ったのか聞かれたが、うまく答えられなかった。以来、39年が経過した。



きんきょう

## 時代の変化と都市計画の変容

これまでを振り返ると、2度のオイルショック、バブルの崩壊、失われた20年など、時代は確かに大きく変化したが、都市計画の仕事も大きく変容した。

1980年7月、「都市計画への挑戦」（西山外三監修）が出版され、著書の一部を執筆分担することになった。この時、都市計画には、「法定都市計画」と「もう少し幅広い都市計画」があることを学んだ。当時、「市民参加の都市計画」が話題になったが、今では、ワークショップの手法が定着し、市民参加は当たり前になってきた。

都市計画は、景観、環境、福祉、文化、産業振興など、ハード（形、空間）だけでなくソフト（中身、仕組み）を含めて幅広く多義的な意味を持つことになった。市民の間では「まちづくり」という言葉も一般化した。

## けいはんな学研都市からウォーターフロントまで

アルパックでは、都市計画に関連するいろいろな仕事をしてきた。けいはんな学研都市の地元である京都府精華町では、総合計画づくりをはじめて経験した。1978年12月に奥田懇談会から学研都市構想が提言され、以来30数年けいはんな学研都市づくりに係わることになった。交通体系や土地利用、学研都市づくりと地域のまちづくり、学術研究と産業のあり方、生活支援ロボットの研究開発、多核格子型のネットワーク形成などさまざまテーマを追いかけてきた。けいはんな学研都市づくりのほかにも、駅前広場、都市計画道路、港湾計画、港湾

再開発、沿岸域管理、ウォーターフロントのパブリックアクセス、広域計画などの仕事をしてきた。

1980年代の後半、米国のサンフランシスコ、ボルティモア、ニューヨーク、ボストン、ピッツバーグ、デトロイトなどの諸都市を調査した。1990年代には、スウェーデン、オランダ、フランスにも調査にでかけ、韓国、シンガポール、タイを訪れて現地調査した。都市やウォーターフロントのあり方について、米国、欧州、アジアの諸都市と日本の都市との比較研究を行ってきた。都市計画と都市を計画することの間には大きなギャップがあることを実感した。

## 都市計画コンサルタント協会のビジョンについて考える意見交換会

昨年11月21日、都市計画コンサルタントのこれからを考える意見交換会が、アルパックの大阪事務所で開催された。東京から協会の佐藤健正会長、ビジョン委員会の荒川俊介副委員長に来ていただき、関西から村橋正武先生（大阪工業大学教授）と都市計画の仕事をしている中堅・若手のコンサルタント7名が参加した。

都市計画の意味、都市計画コンサルタントの役割、協会に求められる課題などさまざまな意見が出て、会議は盛り上がった。

協会の理事として、アルパックで40年近く都市計画に関連する仕事をしてきた一人のコンサルタントとして、都市計画のこれからについて何か発言しておきたいという思いにかられた。

## 都市計画コンサルタントの現状

都市計画は、確かに、魅力のある仕事である。実際、都市計画の



大阪城からみた大阪ビジネスパーク

仕事がしたいという学生が毎年何人かアルパックにやってくる。なんとか希望に添えるようにしたいが、なかなかそうはいかない。

都市計画コンサルタントの外部環境は、正直に言えば、相当厳しい。国や自治体の財政事情は芳しくない。発注方式も、少し前までは、随意契約が一般的であったが、最近では、入札または企画提案方式に大きく変化している。業務発注の透明性、公平性を期するということが当然の流れではあるが、受注するコンサルタントにとっては、受注単価が切り下げられ、受注にあたって大きなエネルギーを割くことを余儀なくされている。こうした背景には、都市計画の仕事はどうみるか、都市計画コンサルタントの役割をどう考えるかという問題がある。

## 都市を計画する仕事のこれから

都市計画は、私たちが住み、働き、様々な市民活動を展開する都市及び地域を計画する仕事と位置づけ新しい感覚でこれからのことを考えたい。日本の都市や地域をもっと魅力と活力のあるものにしていきたい。そのような仕事をする都市計画コンサルタントの職能（プロフェッション）を社会的に確立したい。そうした仕事に、若者たちが希望をもってチャレンジできるような環境を整えたい。

アルパックは、1967年の創業以来45年にわたって、地域とともに歩んできた。地域の課題解決と人々の幸せを追求してきた企業として、時代は変化しても、この理念を堅持して都市を計画する仕事に誇りを持ってこれからも邁進していきたい。



## アイ・スポット NEWS

### 「御堂筋×大阪マルシェほんまもん」を開催しました

アイ・スポットが入居する淀屋橋 odona で毎週水曜日に開催中の「大阪マルシェほんまもん」。11/21（水）に、そのマルシェをプロデュースする福島征二氏をお招きし、御堂筋や梅田スカイビルでのマルシェの取り組みをお話し頂きました。

農の生産者と御堂筋のワーカーをつなぐ場として開催されているマルシェ。仕事帰りのワーカーが野菜を買って帰るだけでなく、周辺のレストランから生産者にお声がかかるチャンスもつくるなど、「一石〇鳥」にもなるように心がけている、という話が印象的でした。

また、御堂筋はマルシェにとっても向いている場所だそうです。その理由は、ストリートとしての格があること、公開空地というマルシェに適した空間装置があること、ワーカーだけでなく住民もいること、などを挙げておられました。御堂筋の空間に農というソフトが挿入されにぎわいを創る、というのはとても興味深く、活用の可能性を感じた次第です。



当日は参加者からたくさんの質問が寄せられ、盛り上がったトークイベントでした。

### 「企業市民のまちづくり」を開催しました

12/11（火）には、企業市民として中央区のまちづくりに関わる団体「CFK（中央区フィランソロフィー懇談会）」の代表幹事、石黒修氏をお招きしてトークイベントを開催しました。

富士ゼロックス大阪のCSR活動として、自社の商品（コピー機）を活かして弱視の方に拡大した教科書を提供する「拡大教科書」の取り組みや、福祉の事業所とまちなかをつなぐ「ミディマルシェ」（トレードピア淀屋橋で開催中）、さらにCFKとして取り組まれている「企業市民セミナー」など、多岐にわたる活動をご紹介頂きました。

石黒さんはとても人情味あふれる方で、どんな人とも「つながり」をつくり、そこから関係を「つむいで」いくことに力を入れておられます。win-win といったニュアンスとは違う、人と人との温かな関係を重視したコーディネートでのプレゼンテーションに、



会場も和やかな雰囲気になりました。

### 開催した講座内容を随時展示中

この間に開催した講座の内容については、随時パネル化してアイ・スポットで展示しています。来場の際はご覧ください。

### 「御堂筋まちづくりトーク #2」を開催します

1/18（金）には、「御堂筋まちづくりトーク #2」として、開催中の「OSAKA 光のルネサンス 2012」で御堂筋イルミネーションの照明デザインを担当されている長町志穂さんにお話を頂くイベントを開催します。ぜひご参加ください。

その他、下記のイベントを企画しています（予定）。ぜひともホームページをチェックしてください。

・御堂筋まちづくりトーク #3

「御堂筋×近代建築」

・中央区のまちあるきイベント

### アイ・スポット NEWS

<http://www.arpak.co.jp/i-spot/>

※アイ・スポットは、淀屋橋にある大阪市のまちづくり情報発信施設です。アルパックでは大阪市から管理・運営を受託しています。

（都市・地域プランニンググループ／絹原一寛）





## うまいもの通信

### 地域で創るご当地バーガー「ねやバーガー」

地域再生デザイングループ/  
羽田拓也

「ねやバーガー」。今、寝屋川を中心に話題を呼んでいるご当地バーガーです。

ねやバーガーは、「寝屋川でつくられ、寝屋川にちなみ、寝屋川を元気にする」をテーマとしており、「①地産地消をテーマに寝屋川で採れた香り高い新鮮な大葉を練り込んだバンズに、②地元契約農家が栽培した新鮮なトマトとたまねぎ、こだわりの特注パティ・そしてベーコンを挟み、③味の決め手となる大葉をふんだんに使用した大葉タルタルソースをサンドしたハンバーガー」を言います。（ねやバーガーホームページより）

ねやバーガーの誕生は、寝屋

川市の若手店主が集まって結成された「ねや川ご当地グルメを創出する会」が、大人から子どもまで誰もが食べ親しんでいるハンバーガーで、地産多消（地産地消）の推進とともに、寝屋川のご当地グルメとして発信し、まちの賑わいを創り出し、寝屋川市を元気にしようという思いから始めた活動がキッカケです。

「創出する会」では、「寝屋川」をコンセプトとしたレシピを広く市民に募集し、昨年で2回目となる「ねやバーガーコンテスト」を開催するなど、ねやバーガーは飲食店だけでなく、他業種、地元農家、市民など多くの人たちの寝屋川への愛情が詰まった寝屋川のソウルフードです！

考案者のお店で食べられる以外は常設の販売店を持たず、販売については、その場で調理ができるようキッチンが設置された「マルシェ号」と呼ばれるワゴン（キッチンカー）で、地域のイベントなどに積極的に乗り出しています。

京阪寝屋川市駅周辺の飲食店が参加して、2012年10月20日に寝屋川市では初



寝屋川産の素材を使ったねやバーガー

めて開催された「第1回ねや川バル」でも参加店54店舗のうちの1つとしてマルシェ号がお目見えしました。当日は、その場で肉厚のパティが焼かれる音と香りに誘われ、長蛇の列がさっそくでき、好評を博していました。

寝屋川の元気な店主自らがつくる、できたての地元の野菜やジューシーなパティが挟まったねやバーガーのおいしさを味わう人々の姿は、まちかどの賑わいを生むだけでなく、飲食店をはじめとする地元の良さをめぐるバルイベントにおけるまちの演出として一役買ってくれました。

マルシェ号の出番は、ねやバーガーのホームページでも公開されています。ぜひ一度、寝屋川の味として味わってみてはいかがでしょうか。

ねやバーガーホームページ  
<http://www.neya-burger.com/>



ねや川バルにも登場した「マルシェ号」

## MEDIA WATCH

### 『大阪アースダイバー』

著者：中沢新一

出版：講談社



紹介者／都市・地域プランニンググループ  
坂井 信行

### 都市を読み解くアプローチ

私たちが通常、都市を読み解くときには次の三つの視点からアプローチしています。

一つ目は地形です。地形は都市の成り立ちに関わるもっともプリミティブな要素といえます。地形によって秩序づけられ、関係づけられたところに領域が生まれ、それが私たちが認識する都市空間へとつながっています。

二つ目は歴史です。いうまでもなく、現在の都市は先人が営々と築き上げてきた歴史の蓄積の上にあるものです。どのような経過をたどって現在の姿に至ったのか、歴史を振り返ることは都市を読み解くうえでは不可欠な要素です。

そして三つ目は人びとの営みです。都市の中には人びとのさまざまな営みがあります。それは暮らしであったり経済活動であったりします。都市の「生きた」姿を捉えるためには、人びとのアクティビティに着目する必要があります。

### アースダイバーの方法

中沢新一氏が提唱するアースダイバーの方法は、こうした私たちのアプローチとは少し視点が異なっています。東京を舞台とした前著『アースダイバー』では次のように述べられています。

「人間の心のおおもとは泥のような「無意識」であり、私たちは無意識をこね上げて社会をつくってきた。泥を材料にしてつくられてきた人間の心という陸地が水中に沈みかけている、そこで水の中に潜って底のほうから一握りの泥をつかんできて、それを材料にしてもう一度人間の心を泥からこね直す、そんな気持ちで東京を見回してみると、これまで気づかなかったものが見えてきた。」

縄文時代に遡って地質の分布を追っていくと、固い岩盤をもった洪積層と河川が運んできた土砂の積もった砂地の多い沖積層に大別できるそうです。そして洪積層には乾いた文化が息づき、沖積層には湿った文化が息づく、こうした考え方に

そって都市の成り立ちを読み解いていくのがアースダイバーの方法です。

### 大阪をアースダイブする

ここまでは東京を対象にした話。今回取り上げる『大阪アースダイバー』ではかなり様子が違ってきます。

大阪は洪積層と沖積層といったシンプルな二分法では説明できないのです。大阪の中心部の土地は水中から「生成」したのであり、大阪は東京のように洪積層の台地にできた都市ではなく、やわらかい無定形の土砂の上にできた都市である、そのため空間の感覚を秩序づける何らかの座標軸が必要になってくる、というのです。そして、その座標軸として示されているのが上町台地に沿った南北軸と、生駒山へと向かう東西軸であり、南北軸は権力を表す「アポロン軸」、東西軸は生と死の循環を表す「ディオニュソス軸」と名づけられています。

そしてもう一つ、海民出身の商人が二つの軸の脇あたりで不定形な島々の上につくった「ナニワ」、この三つのトポロジーの組み合わせで大阪はできていると。トポロジーというのは柔らかい幾何学のこと。絶えず変化をとげてきた大阪には表面上の形は大きく変わっても、一貫して変化しにくい深層の構造があるとも。学術的根拠はともかく、こうした構想力は非常に独創的だと思います。

### 都市を再編集する方法としてのアースダイビング

アースダイバーは厳密な史実に基づいているわけではないため創作にすぎない、といった批判も一部にはあるようです。しかし、人びとを惹きつける非常に魅力的な方法であることは間違いありません。歴史を読み解くというよりもむしろ、新しい視点から都市を再編集していく、まちづくりの今日的アプローチの有力な方法の一つとして捉えていくこともできるのではないのでしょうか。まちづくりにかかわる者にとって、前著の『アースダイバー』とともに本書は貴重な示唆を与えてくれるはずです。



## 海と島と街を巡るクラフトフェア 瀬戸内生活工芸祭 2012

地域再生デザイングループ／森岡武

今年度、「市民一人一人が創造的に働き、暮らし、活動する都市」をめざす『高松市創造都市推進ビジョン』策定のお手伝いをしています。

そんな中、昨年11月23日（祝・金）～24日（土）に開催された瀬戸内生活工芸祭2012に行ってきました。会場は高松駅近くの玉藻公園とフェリーで約20分の目と鼻の先の女木島。三連休の初日でもあり新大阪で足止め、高松に着くと長蛇の列。なかなか会場にたどり着きません。深夜バスは満席、市内のホテルは満員といった盛況ぶりで、日帰りを予定していましたが、結局宿泊する破目に。これほど多くの人たちは、何を求めて集まったのでしょうか？

会場構成は、クラフトマンの作品展示・販売（87ブース）と生活工芸を考える企画展。ガイドブックによると生活工芸を作る人たちと、それを使う人たちが、仕事の実りをともに祝う収穫祭とあります。

訪れた人たちは、島に渡ったり、大きな公園に抱かれたり、ちょっとしたトリップ感とゆったりとした時間と空間の中で、手に取った生活工芸品を介して日々の暮らしに想いを馳せたり、本当に豊かな一時が過ごせます。

祭りのディレクターによると、この手のクラフ



女木島（生活工芸の5つのかたち 三谷龍二）海岸沿いのビーチハウスを改修：入場するのに1時間かかった

ト展、アート展は日本中に浸透し、作家や作品も広く知れ渡り、プログラムとしては終焉を迎えつつあるといます。では仕掛け人はどこに向かっているのか？生活工芸はスペシャルではなく、日常であることを意識し、それらに囲まれて暮らす豊かな地平を見据えているようです。この考え方はまちづくりにも通じると思います。

以前、世界で活躍するデザイナーの喜多俊之さんから、世界に通用する日本のデザインは、「手の痕跡を残す丁寧なモノづくり」だとお聞きしたことがあります。

我々が手掛けるまちづくりも手の痕跡を残す丁寧な仕事をしないといけないと考えた2日間でした。



玉藻公園内の披雲閣（忘れられた器 赤木明登）  
：蔵に眠っていた器らしい



玉藻公園内の披雲閣  
（道具の起源 赤木明登）

## アルパック(株)地域計画建築研究所

Architects Regional Planners & Associates · Kyoto

<http://www.arpak.co.jp> E-mail [info@arpak.co.jp](mailto:info@arpak.co.jp)

本 社

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四條通り高倉西入立売西町 82  
大阪事務所 〒540-0001 大阪市中央区城見 1-4-70 住友生命 OBP プラザビル 15F  
名古屋事務所 〒460-0003 名古屋市中区錦 1-19-24 名古屋第一ビル 6F  
東京事務所 〒102-0074 東京都千代田区九段南 3-5-11 スクエア九段ビル 1F  
九州事務所 (株)よかネット 〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町 3-8 福岡パールビル 8F

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764  
TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478  
TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760  
TEL(03)3288-0240 FAX(03)3288-0221  
TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」  
kikito ペーパーを使用しています。